



[講演]

# グローバル・ コンピテンス 育成と中国語教育

外国語教育研究センター教授  
森平 崇文 氏

○任 では、はじめに森平崇文先生にご講演いただきます。ご講演のタイトルは、「グローバル・コンピテンス育成と中国語教育」です。森平先生、よろしくお願いいたします。

○森平 任さん、どうもありがとうございます。皆さん、こんにちは。外国語教育センターの森平と申します。本日は日本語教育センターのほうから大変貴重な機会を与えていただきまして、ありがとうございます。このグローバル・コンピテンスという言葉、それを外国語教育でどのように取り入れて生かしていくかということにつきまして、中国語のほうで特に決まったものはありませんが、今回立教大学の外国語教育研究における最先端を学ばせていただいて、中国語教育で活用できればということで発表を引き受けさせていただきました。タイトルは「グローバル・コンピテンス育成と中国語教育」ということでお話をさせていただきます。【スライド②-1】

報告の要旨ですが、発表者が外国語学習や留学を通じて他者と共存しながらコミュニケーションを図り、行動していく力を習得した過程、および立教大学の中国語教育におけるこのグローバル・コンピテンス習得と関連させた実践と今後の展望について紹介するということで、先ほど申し上げましたとおり、私自身も、それから中国語教育ですね、立教におきましても、このグローバル・コンピテンスということについてははまだ全然、進展がないんですけども、このシンポジウムの構想をお伺いした際に、他者と共存しながらコミュニケーションを図り行動していく力というのは、確かに自分自身を振り返りましても、外国語教育を通じて、それから留学を通じて、ほかのどの学習よりも身につけたのがこの外国語教

育を通じてだったなということに共感いたしましたして、自分自身のことをちょっと振り返りながら、そして立教大学の中国語教育でもささやかながらやっていることについて話させていただければということで、あまりアカデミックな話にならないと思うんですけども、開口一番ということで、耳を汚させていただければと思います。【スライド②-2】

まず報告内容ですが、大きく3つに分けております。まず私自身の話をさせていただければということで、中国語学習と中国滞在を通じて習得したものを、主に2つの話をさせていただきます。続きまして、立教大学の中国語教育における実践例ということで、私自身もこの外国教育研究センター発足と同時に立教大学に着任でまだ2年目ですが、今から振り返るとこのグローバル・コンピテンス育成に関係できるようなことを少しできたかなと思っている部分についてお話をさせていただければと思っております。最後に、立教大学における中国語教育の展望ということで、いかにこのグローバル・コンピテンスの育成というものを取り入れながら、新しいテキスト、新しいカリキュラムを作っていけるかということについて紹介できればと思っております。【スライド②-3】

初めに、中国語学習と中国滞在を通じて習得したものということで、非常に個人的なお話なんですけれども、具体的なお話をしたほうが皆さんにイメージが付きやすいのかなと考えましたので、自分自身の留学、あるいは中国学習を通じてグローバル・コンピテンスみたいなものをいかに習得できたかということについてはお話をさせていただこうと思います。この後ろの背景にあるのは、私が入学しておりました安徽師範大学の現在の校門です。留学当時と大きく変わっていません。【スライド②-4】

まず、中国や中国語とのかかわりということで、半分自己紹介的なことになりますが、私自身も中国語との出会いというのは、多くの立教生と一緒に、大学に入学した後、第二外国語として選択したことからスタートいたしました。それがスタートなんですけれども、専門は中国のメディアや芸能や上海のことをやっております。今年度、担当している科目は中国基礎1、2、中国語中級1、2ということで、主に基礎1、2のほうは必修科目の1年生が主な対象になっています。中級のほうは新座のほうで担当してまして、2年生以上の中国語既習者を対象にした授業をやっております。

中国とのかかわりで申し上げますと、2000年9月から翌年の8月まで1年間、

安徽省蕪湖市にあります安徽師範大学に留学いたしました。その翌月の2001年の9月から翌年の7月までと、2005年2月から2006年の1月にかけて上海市に滞在ということで、だいたい合計で3年ぐらい中国に留学しておりました。長期滞在はこの3年間ですが、それ以外にも、このコロナが発生するまでは、年平均で3回から4回、多いときですと10回以上、資料調査とか学生の引率などで中国に短期滞在をするというような形で中国語、あるいは中国との関係が続いております。**【スライド②-5】**

安徽省と上海市と言われてもピンとこない方もいらっしゃると思いますので、紹介させていただきたいと思います。まず、中国の地図を見ていただくと、こちらが安徽省です。中国では内陸部に位置しております。この最初に1年滞在した安徽省蕪湖市ところは人口380万ぐらいの都市で、中国の典型的な地方都市でした。自分の周りに日本人はいないという環境でした。この蕪湖市の人たちは、上海などの大都市に出稼ぎに行くという方が非常に多かったです。実際に現地で知り合った方も何年前までは上海に行って働いていたとか、そういう方が非常に多かったところでした。その後、計2年滞在しました上海市は、人口が2,600万ぐらいの大都市ですが、中国最大の経済都市です。場所はこちらなんですけれども、安徽省のほうでは日本人は誰もいなかった環境でしたが、こちらは1大学に500人ぐらい日本人がいました。大学が複数あるわけですので、相当な数の日本人、しかもが留学生だけではなくて、会社から派遣されて駐在している方々、その家族、そういった人たちも含めると、相当な数となります。それから、日本に留学したことがある、日本語が話せるという中国人もかなりいました。安徽省にいたときは、私が初めて会った日本人だ、みたいな人がとても多かったですし、日本語の話せる人というのはほとんどお目にかからなかったんですけれども、上海では全く逆ということで、何が言いたいかというと、地方都市と大都市、それぞれで生活できた。それから、特に上海では1年間、大学の外で部屋を借りることができました。そこで得たものというのは、中国を理解する上で非常に有用でした。どうしても中国というのは広いので、一面的な自分の体験から全体を見ようとするんですけれども、絶対にそれでは全てのことを見ることはできないわけですね。私がいたのはこの2つの都市だけですし、地域的には中国の真ん中の周りですので、北のほうや西のほう、それから南のほうのこと、全て分かったわけではないんですけれども、一応、2つの都市、全く違うタイプの地域で生活

できた。それから外に住んだことによって日常生活、電気やガスを引いたりとか、水道料金を払ったりとか、ゴミを捨てたりとか、そういった生活の細々としたことを自分で全部やったということも非常に有用であったなと考えています。【スライド②-6】

この留学を通じて特に私が学んだことというのは、「多少钱？」という言葉です。中国語をやったことのある方であれば皆さんお聞きになったことがあるかもしれませんが、これは値段を聞く言葉です。「多少钱？」「太贵了」「便宜点儿」。これは日本の初級の中国語の教科書に必ず出てくるフレーズになっています。買い物時に値段交渉が必要な当時の中国では、このフレーズをネイティブ並みに発音できるかで値段が変動しました。まず最初にコミュニケーション取る言葉がこれなんです。これを聞いて、何か変な発音だなと思われると、次に出てくる言葉は、「お前はどこの人間だ」となり、値段を教えてくださいません。幾らという前に、まずどこの人間なんだと。外国人だと分かると、幾らだということで、かなり高めに吹っかけられてしまう。だから、いかに、外見上同じアジア人なので、言葉さえちゃんとネイティブ並みに発音できれば損はしないということで、この「多少钱？」という言葉はいかにネイティブ並みに発音できるかということが非常に大きな、切迫した問題でした。ただ、自分が留学中、「多少钱？」という発音が苦手でした。どんなに発音してもばれてしまうことが多いんですね。この「多少钱？」そのものは通じたとしても、その後、値段交渉する際に発音がおぼつかなくなると、「おまえどこの人間だ」というのがまた出てくることがありました。別の表現で「怎么卖」、どのように売りますかという表現があるということを知りまして、それを使って何とか対処するといったようなことも覚えました。ネットショッピングが現在隆盛しておりますけれども、その以前は、売り手の顔を見ながら、双方が得をした気分させる値段交渉というのが中国コミュニケーションの第一歩であり、最終試験でもあると私はこのときに覚えました。つまり、値段交渉は必ずしなければいけないわけなんですけれども、そのときに完全に自分の思っている値段だけを押すというのは、決して、駄目なんだと。相手も考えている値段があって、許容範囲がこちらもある。その落としどころを売り手と買い手でコミュニケーションを取りながら図っていくということがとても大事なんだということを非常に学びました。留学時はまだ若く、自分の主張を相手に一方的に通そうと思ってしまいうんですけれども、それでは駄目なんだと。相手も少し得をした

という気持ちにさせ、自分のほうも得をする。だから、ある程度、安く設定してだんだん上げていって、向こうも下げていって、ちょうど落としどころを見つける。それを言葉で、外国語で交渉していくということをいかに大切なことかということをお勉強できたなと思っています。これは毎日のように使用する言葉なので、誰でも最初に覚える表現なんですけれども、実は、人とのコミュニケーションをする上で、特に中国でコミュニケーションをする上で大事な表現であると学びました。私の場合は主にマーケット、自炊をしていたので野菜を買ったり、肉を買ったり、魚を買ったり、卸問屋で学びました。留学生だったのでいかに安く物を買うかということで、衣類とかを買うときに卸問屋まで行って買ってくるとか。それから、古本市とか、こういうところで「多少钱?」、この言葉自体は、ネイティブ並みに発音するという事以上に、それを通じて人とコミュニケーションしていく際に、相手の顔も立てなければいけない、お互いに気持ちよくなればいけないということをおぼせていただいた非常に重要な言葉だったと思います。

次に留学先の変更交渉に関してです。中国政府の派遣でしたので、留学先が自分で選ばせませんでした。結果的に第3希望の安徽省師範大学に決まりました。後で聞いたら、この大学を第一志望にしている学生は、留学生の中に誰もいないそうで、私と同期で30人ぐらい、各国の留学生がこの大学に来たんですけれども、誰も第一希望の人はいませんでした、第三希望、あるいは希望も書いていないのに突然こちらに派遣されたというような。結果として中国の地方を知ることができるのでよかったんですけれども、ただ、自分は上海のことを研究したかったので、第一志望であった上海の復旦大学にどうしても、2年目は移りたいと考えておりました。ただ、その派遣期間は2年間だったんですが、転校というのは原則認められていなかったんです。ただ、その但し書きがあって、双方の大学から同意が認められれば可能という但し書きを知りまして、交渉することになりました。私の前にも、スリランカの留学生やルワンダの留学生がこれに挑戦してみんな撃沈していったのを見ていたので、私も無理かなと思っていました。聞いてみると、やっぱり相手の大学がいいと言ったらいいですよと、双方の大学から言われました。でも、それは結局、じゃあどっちが言ってくれるんだということ、お互いに相手がいいと言ったらということだったので、もう今いるところは絶対に人数を減らしたくないわけですから、もう上海の大学にOKをもらうしかな

いんだということで、上海まで当時、電車で5時間ぐらいかかるんですけども、3往復ぐらいしまして、とにかく向こうの大学からOKをもらうという交渉をしました。

結局、だいたい3ヶ月ぐらい、この2つの大学と交渉して同意が得られて、上海の復旦大学に転校できました。このときたまたま上海の大学の留学事務の方が日本に留学したことのある方だったということと、私が研究のために移りたいんだという理由で転校が認められました。単に都会がいいとか、そういう理由じゃないんだということを分かっていたいて、うまく交渉できたんですけども、この留学1年目に、非常に拙い中国語で交渉してできたということは中国語上達の非常に良い機会になったなと思います。特に支援を得られるという状況ではなかったので、そういう状態でいろいろ交渉できたというのは、非常に中国語の勉強にもなったというふうに思っています。【スライド②-8】

この中国によるコミュニケーションを通じて学んだことなんですけれども、1つの言語をマスターできると新しいことに挑戦しても何とかなるのではないかという根拠の弱い自信がつかます。これは私自身の経験でそう思いました。だから、1つの言葉が、何語でもいいんですけども、話せるようになると、何か他のことに挑戦してもできるんじゃないかなという気になり、挑戦しやすくなります。それから、ルールがあっても相手に配慮しながら諦めず交渉していけば、たとえ少しであっても変更することができるんだということも学びました。日本は非常にルール、ルールで杓子定規なので、あまりそういうことを考えないですけども、海外に行くと「あなた次第です」ということを非常に実感させてもらうことができました。それから、地方都市から上海へ移動するという多くの中国人と同じ経験をすることで、現代中国のことを多面的に体感できたなと思っております。

#### 【スライド②-9】

では今、立教大学の中国語教育でどのように私が自信を得たことを実践しているかということなんですけれども、【スライド②-10】1つ目は、とにかく中国語学習を通じて、達成感を得てほしいと私自身は考えています。中国語学習を通じて達成感とか自信を得て、新しいものに挑戦するハードルを下げてもらいたい。これは先ほど私が申し上げました通り一つ何か外国語ができると、自己肯定感が高まるという効果があると思います。だから、何語でも構わないというので、とにかく1つの言葉を一生懸命やって、それが身につけば、何か他のことにチャ

レンジできる、しやすくなるんじゃないかということを知ってもらいたいということです。それから、中国語学習を通じて中国語のネイティブと交流、交渉する方法を習得する。先ほどの値段交渉の話ではないですけども、別に言葉が話せても、コミュニケーションにそれがイコール、結びつきません。いかにその言葉を使って相手とうまく交渉していくかということを知っていただきたいと思います。それから、自分の興味のある分野から同時代中国に関心を向けて深く掘り下げるということもあります。中国と日本に近いですし、共有している文化も多いので、しかも変化が激しいですから何かニッチな分野ですごく詳しく調べると、もうそれだけで第一人者として認められます。だから、それはすごくチャンスなので、ぜひやってもらいたいなと思っています。これは竹内諒という方の演出しているドキュメンタリー動画で、今、YouTubeで「街録チャンネル」というのが日本にはありますけれども、その中国版です。「我住在这里的理由」、私がここに住む理由という番組名で、中国や日本で活躍している日本人と中国人にインタビューするものです。必ず授業の中で1学期中には1回ぐらいはこれを紹介しています。この映っている方は北京在住で、北京で漫才師を目指している日本人です。お笑い芸人になろうというのはよほど言葉が巧みでなければいけないんですが、一生懸命、頑張っている人を追っかけている動画です。この番組を通じて、外国語を使って何か突破できるんだということを知ってもらおうというふうにしてあります。【スライド②-11】

それから、オンラインを通じた同世代の中国人との交流ということで、たまたま知り合いがいます上海の東華大学の日本語学科を窓口にして、その学生とオンラインで交流会というのをやりました。昨年はスタンダード4という自由科目で、中国側が日本の現代文化に関する発表を日本語で行って、立教生がコメントして発表し、その後、その発表をもとに話し合う交流会をオンラインで開催いたしました。それから、今年の春の中国語中級1では、双方の大学を学んでいる言語で紹介ということで、立教生は中国語で立教大学と自分の所属する学部、及び、池袋や新座キャンパスについて紹介するといったようなことをしました。それから、同じく今年の春なんですけれども、1年生の授業で、日本側がそれぞれ中国語で質問事項を用意して交流しました。中国語を学んで3、4ヶ月の学生ですので、質問できる内容としては、「あなたの好きな漫画なんですか」とか、その程度の言葉なんです。とにかく中国でそれを言ってネイティブの人に通じる



かどうかということで質問事項を決めて、向こうの人にそれを答えてもらうというようなことをしました。これはもうまさにオンラインだからこそ、しかも時差が1時間しかない、また、日本語を学んでいる学生がとて多い中国だからこそ、今、日本に行けないから、ぜひ日本と交流したいということで、そういう状況だからこそできたことかなと思っています。とにかく同世代の中国人と実際に交流してみる。それはオンラインであろうと、対面であろうと構わないので、こういう場を設けられたということは非常によかったなと思っています。【スライド②-12】

それから、中国のニッチな分野におけるプレゼンの場を設けるということで、「世界を知ろう」というのを立教大学が毎年全力のほうでやっている会があります。中国語では、昨年度も今年もなんですけども、学生の皆さんに発表してもらうということをしております。中国語科目履修者から立教全力で主催する中国語講演会の発表者を選び、20年度はアイドルグループとドラマ、21年度は動画番組、SNS、音楽の特定の分野につき発表する場を設けるということで、例えば、今年発表していただくのは、あるテレビ番組、オーディション番組なんですけども、その番組に関してはその学生が恐らく日本で第一人者になりえます。その分野だけに関しては、それは非常に達成感を与えるという点で非常にいいことだと思っていますので、そういう場というのは、これからも設けていきたいなと思っています。発表の準備を通じて、現代中国の特定の分野に対する理解を深めるということで、ただ授業内で発表ですと、そんなに聴衆も少ないですけども、こういう大きな場所を作ってそこで発表してもらうことで、分野を詳しくなるだけではなくて発表する場を通じて、プレゼン力というのも高まるのかなと思っています。今年は11月13日にやりますので、ぜひ皆さんもご視聴ください。【スライド②-13】

それから、ロールモデルの紹介ということで、昨年度は立教文学部を卒業された先輩にお話をさせていただきました。その方は1年次の春学期に中国に短期留学して、3年生の時に1年間の交換留学をして、卒業後は外務省に専門職で入省されて対中外交の最前線にいるという方です。その方に自分の中国語学習がキャリアにいかに関結びついているかというロールモデルを話していただくということをやりました。こういうふうにならなくて今学んでいることが実際にどのように自分のキャリアに活かせるのかということをお私たちが口酸っぱく言ってもなかなか学生には響かないんですけども、そういう方が立教の先輩でいるんだということを皆



さんに知ってもらおうということが、とても大事なことかなと思っております。【スライド②-14】

では、最後になりましたが、立教大学における中国語教育の展望ということで【スライド②-15】、1つ目が授業と留学の有機的な連携です。先ほどのロールモデルの先輩じゃないですが、1年間授業を受けて、短期留学、1週間でも2週間でもしてもらい、その後、自由科目を2年次以降に履修してもらって長期の派遣留学に行ってもらおうということにすると、中国語を活かした進路というのが見えてくると思います。学内での学習と現地での留学を連動させて、言語Bであっても語学が武器になるということを知ってもらいたいです。中国というのは同じ漢字文化圏ですし、近いですし、それから留学費用も比較的安いということで、日本語ネイティブにとっては、実は中国語学習に非常に有利な条件がそろっているんだということを履修者の人にもアピールしていければと思っております。【スライド②-16】それから、対外漢語教授法の積極的利用ということで、国内と留学の中国語学習をさらに有機的に連携させるためにも教授法とか評価方法において齟齬がないように、中国でやっている教授法というのを積極的に取り入れていきたいなと思っております。【スライド②-17】

すみません、時間が少しオーバーしてしまって申し訳ないんですけども、私の発表は以上とさせていただきます。私の発表は以上です。【スライド②-18】

○丸山 森平先生、どうもありがとうございました。短く質問の時間がとれますので、ご質問のある方がいらっしゃいましたら、「手を挙げる」のボタンを押していただければと思います。ご質問の際には初めにご所属とお名前をお願いいたします。いかがでしょうか。

先ほど申しそびれたんですけども、本日の進め方ですが、今、森平先生が今ご講演くださったように、約20分のご講演の後、質疑応答で5分取るという形で進めてまいります。3名の先生にご登壇いただいた後に少し休憩をとりまして、その後、4人目の登壇者、その後、全体討議という形で進めさせていただきます。いかがでしょうか。池田先生、手を挙げてくださっているようですね。お願いいたします。

○池田 森平先生、ありがとうございました。聞いていて非常に興味深かったんですけども、学生がプレゼンをする企画で大きなテーマは決まっていたけれども、そのテーマの枠の中でそれぞれ学生が違ったトピックでプレゼンを考え

ていたと思うんですが、それは学生自身が、自分はこれがやりたいということで選んだものなんでしょうか。

○**森平** 池田先生、質問ありがとうございます。エンタメ情報という枠は私のほうで決めております。その中であれば何でもいいということで、皆さんそれぞれ得意分野があると思うので、その得意分野は自由に決めてもらって、私のほうは、内容はかぶらないように調整するというだけで、あとは学生の皆さんが、もう既にこの発表を担当者を決める前から関心を持っていたことについて発表してもらおうというやり方をとっております。以上です。

○**池田** ありがとうございます。積極的な学生が多い感じですね、すごくいいなと思いました。ありがとうございます。

○**丸山** ありがとうございます。他にいかがでしょうか。よろしゅうございますか。森平先生、どうもありがとうございました。

【スライド②-1】

日本語教育センターシンポジウム2021  
「グローバル化時代の言語教育を考える  
～グローバル・コンピテンス育成の視点から～」

# グローバル・コンピテンス育成と 中国語教育

2021年10月23日  
森平崇文  
外国語教育研究センター

【スライド②-2】

## 報告要旨


- ▶ 発表者が外国語学習や留学を通じて、他者と共存しながらコミュニケーションを図り、行動していく力（GC）を習得した過程、及び立教大学の中国語教育におけるGC習得と関連させた実践と今後の展望について紹介する。

【スライド②-3】

報告内容

- 1, 中国語学習と中国滞在を通じて習得したもの
- 2, 立教大学の中国語教育における実践例
- 3, 立教大学における中国語教育の展望

【スライド②-4】

- 1,  
中国語学習と  
中国滞在を通じて習得したもの
- 

【スライド②-5】

## 中国、中国語との関わり

- ▶ 中国語は大学入学後、第二外国語として学習
- ▶ 専門は中国のメディアと芸能、上海史
- ▶ 今年度の担当科目は、「中国語基礎1・2」「中国語中級1・2」
- ▶ 中国へは2000年9月～2001年8月まで安徽省蕪湖市、2001年9月～2002年7月と2005年2月～2006年1月まで上海市に滞在
- ▶ 長期滞在以外にも2019年までは年平均で3～4回、資料調査等で中国に短期滞在

【スライド②-6】

## 安徽省と上海市

- ▶ 最初に1年滞在した安徽省蕪湖市（人口380万）は中国の典型的な地方都市で、周囲に日本人もいない。上海など大都市へ出稼ぎに行くものも多数。
- ▶ その後計2年滞在した上海市（人口2,600万）は中国最大の経済都市、1大学に500人の日本人留学生。
- ▶ 地方都市と大都市、それぞれで生活、特に上海で1年間学外に居住したことは中国理解に大いに有用であった。



## 【スライド②-7】

## 多少钱？（いくらですか？）

- ▶ 多少钱？ 太贵了！ 便宜点儿吧。  
Duōshǎoqián? Tàiguìle! Piányidiǎner ba.
- ▶ 日本の初級中国語教科書に必ず出てくるフレーズ
- ▶ 買い物時に値段交渉が必要な当時の中国では、このフレーズをネイティブ並みに発音できるかで値段が変動した。
- ▶ 留学中、「多少钱」の発音が苦手であることを自覚し、別の表現「怎么买 zěnmemài」を多用して対処した。
- ▶ ネットショッピング隆盛以前、売り手の顔も立てながら双方が得をした気分させる値段交渉は中国語コミュニケーションの第一歩であり、最終試験でもあった。



値段交渉の主戦場はマーケットと卸問屋、古書市

## 【スライド②-8】

## 留学先の変更交渉


- ▶ 中国政府の派遣留学であったため、留学先が自分で選べず、結果的に第3希望の安徽師範大学へ
- ▶ 上海研究のため、第1志望であった上海の復旦大学へ転校を画策
- ▶ 派遣期間の2年間、転校は原則認められないが、双方の大学から同意が得られれば可能と知る
- ▶ 3か月両大学と交渉し、同意が得られ上海の復旦大学へ転校
- ▶ 留学1年目の拙い中国語で交渉し、中国語上達により機会となった

【スライド②-9】

## 中国語によるコミュニケーション を通じて学んだこと

- ▶ 1つの言語をマスターできると、新しいことに挑戦しても何とかできるのではという、根拠の弱い自信がつく。
- ▶ ルールも、相手を配慮しながら諦めず交渉していけば、少しでも変更することが出来ることを実感した。
- ▶ 地方都市から上海への移動という、多くの中国人と同じ経験をすることで、現代中国を多面的に体感できた。

【スライド②-10】



## 2, 立教大学の中国語教育 における実践例



## 【スライド②-11】

## 中国語学習を通じて習得を望むこと

- ▶ 中国語学習を通じ、達成感や自信を得て、新しいものに挑戦するハードルを下げる。
- ▶ 中国語学習を通じ、中国語ネイティブと交流、交渉する方法を習得する。
- ▶ 自分の興味ある分野から同時代中国に関心を向け、深く掘り下げる。



竹内亮演出のドキュメンタリー動画  
中国語版街録ch《我住在这里的理由》  
中国語の授業内でも紹介

## 【スライド②-12】

## オンラインを用いた同世代の中国人との交流

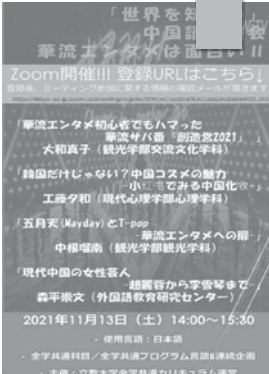
- ▶ 東華大学（上海市）日本語学科の学生とオンラインで交流会を開催
- ▶ 「中国語スタンダード4」（20年度秋）では中国側の現代日本文化に関する発表に、日本側がコメントし、発表を題材に交流
- ▶ 「中国語中級1」（20年度春）では双方の大学を学んでいる言語でそれぞれ紹介
- ▶ 「中国語基礎1」（20年度春）では日本側がそれぞれ中国語で質問事項を用意し交流



【スライド②-13】

## 中国のニッチな分野に関する プレゼンの場を設ける

- ▶ 中国語科目履修者から、立教全カ力で主催する中国語講演会の発表者を選び、20年度はアイドルグループとドラマ、21年度は動画番組、SNS、音楽の特定の分野につき発表する場を設ける。
- ▶ 発表の準備を通じ、現代中国の特定の分野に対する理解を深める。




今年度は11月13日14時からです。  
是非ご視聴ください。

【スライド②-14】

## ロールモデルの紹介

- ▶ 20年度には、立教文学部1年次の春学期に中国語の短期留学、3年次に中国語圏へ1年間の長期留学、卒業後外務省に専門職で入省され、対中外交の最前線にいる校友を講師に招き、中国語学習がキャリアに結びつくロールモデルとして講演していただいた。



【スライド②-15】

## 3, 立教大学における 中国語教育の展望

【スライド②-16】

### 授業と留学の有機的な連携

- ▶ 基礎科目⇒短期留学⇒自由科目⇒長期留学⇒中国語を活かした進路
- ▶ 学内での学習と現地での留学を連動させることで言語Bであっても語学が武器となる。
- ▶ 漢字文化圏、往来しやすい地理的距離、比較的廉価な留学費用等、日本語ネイティブにとり中国語学習には有利な条件が多数揃っている。

【スライド②-17】

## 中国の「対外漢語」教授法の積極的活用

- ▶ 学内と留学時における中国語学習を更に有機的に連携させるため、教授法や評価方法においても齟齬を減らす必要が生じる。
- ▶ 中国は1980年代より留学生向けの中国語教授法（「対外漢語」）の開発に熱心であり、立教大学の今後の中国語教育においても「対外漢語」の教授法を積極的に採用する。

【スライド②-18】

発表は以上です。

ご清聴ありがとうございます。